

南高図書館報

限界集落を救った物語

教頭 橋本 孝之

限界集落という言葉を知っていますか。限界集落とは過疎などで人口の五〇%以上が六五歳以上の高齢者になることで、冠婚葬祭などを含む社会的共同生活や集落の維持が困難になりつつある集落を指します。これが七〇%以上になると危機的集落といい、最終的には廃村・消滅へと向かいます。現在日本では少子高齢化に加え、地方から都市への人口流出により過疎化が進行しています。ちなみに愛南町の高齢化率は二〇一九年で四二・七%、二〇三〇年に五二・二%になると予測され、限界集落への危機が迫っています。

私は昨年三月まで高齢化率四七・二%（愛媛県第一位）の久万高原町にある上浮穴高校に勤務していました。久万高原町は全国でも有数の高品質のスギ、ヒノキを生産する林業地帯でしたが、安価な輸入木材や住宅様式の変化により基幹産業の林業は衰退し、後継者は就業先を求めて町外に流出していきました。それに伴って上浮穴高校の全校生徒数も昭和四〇年代の約七〇〇名から現在約一二〇名へと減少し、学校存続の危機に直面しています。このように第一次産業を基幹とする愛南町にある南宇和高校も他人事ではありません。

昨年一月の全校集会で私が前任校で取り組んでいた山林に自生するクロモジの木から精油を採取して特産品開発の研究を紹介しました。今回はその時に参考になった二冊の本、『そうだ、葉っぱを売ろう！過疎の町、どん底からの再生』横石知二著、『ローマ法王に米を食べさせた男』高野誠鮮著を紹介し

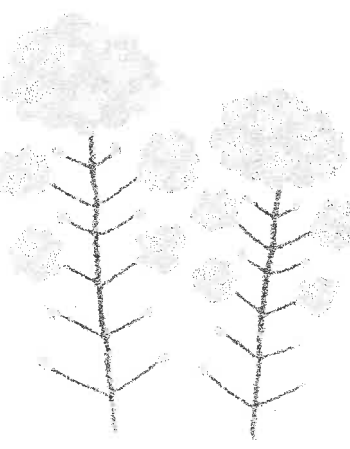
ます。二つの共通点は地域の良さを見つめ、地域資源を活かし、過疎の町を活力ある町に変えていったところにあります。

『そうだ葉っぱを売ろう』の舞台である徳島県上勝町の大部分は標高七〇〇m以上の山地で、人口一六〇〇人、高齢化率五〇%の四国一小さな町ですが、世界各国から年間二六〇〇人も視察者が訪れる凄いい町でもあります。その理由は、自然と高齢者の知識を活かして山々から採れる季節の葉や花を日本料理に添える「つまもの」用として市場に出荷する「葉っぱビジネス」で年間一〇〇〇万円を稼ぐおばあちゃんが生産したこと、ゴミの分別が日本最多でありリサイクル率が八〇%でゴミ収集車のない町であることなどにより、移住者は住民の一割にのぼっているからだそうです。本書は著者の横石氏が仕掛けた二八年間の取組みが紹介され、町が変わっていく過程をワクワクしながら楽しめると思っています。

『ローマ法王に米を食べさせた男』の舞台は、石川県羽咋市神子原地区、人口五二七人高齢化率五七%の「限界集落」です。市役所の職員だった著者の高野氏は、農業では暮らせないから若者は都会へ出てしまおうという実態に強い危機感を抱きます。そこで当時の市長から「集落の活性化」と「農作物のブランド化」を任せられました。幸いなことに神子原の棚田で育てられた米はとても美味しく、有名人が「神子原の米は美味しい」と言ってくれば素晴らしい宣伝になると考えました。神子原を英語にする「サン・オブ・ゴッド」で、キリスト教で最も権威があるローマ法王に「うちの村の米を献上したいのですが」と手紙を送ったのです。念願が叶い、「ローマ法王に献上された米」として国内外のトップニユースになりました。その活躍ぶりから高野氏は、限界集落を年間六〇万円、しかもわずか4年で立ち直らせた「スーパー公務員」として有名になり、平成一五年には「ナポレオンの村」この村の辞書に

不可能という文字はない」としてドラマ化されました。

最初、高野氏は「売れる知恵」を盗むために予算六〇万円のうち五八万円を使って、二〇名の農家を連れて二つの有名直売所の視察旅行を行いました。その一つが愛媛県内子町「からり」であり、「トレーサビリティ」「減農薬・無農薬栽培」による「新鮮・安心・安全」な「高くて売れる店」として年商七億円の有名な直売所です。その時、椎茸農家のおばあちゃんから「ここに椎茸が入った一三〇〇円の大きな袋と九〇〇円の小さな袋がある。この二つの商品が並んだら、あんたはどっちを取る？この小さい袋の九〇〇円はタミー商品で、こんだけしか入ってなくて九〇〇円、こんなに入って一三〇〇円、四〇〇円高くてこっちのほうがたくさん入ってお得感があるからつい買ってしまう」という話を聞いたのです。聞けばそれまでJAに出していた時は夫婦で一生涯働いても四〇〇万円だった収入が、直売所では軽く一〇〇〇万円以上になり、息子も農家を継ぎに帰ってきたそうです。やっぱりしたたかな知恵や戦略があるところは生き残ってうまくやっている。高野氏はそれを実感したそうです。本書は筆者の奇想天外な発想力や行動力が大変参考になりました。愛南町にはみなさんの知らないいいところがたくさんあります。ビジネスチャンスも無限大です。みんなで見つけてみませんか。



第六十五回 青少年読書感想文全国コンクール

愛媛県審査会 課題図書部門 佳作

心の震災

二年 善家 未空

「わたしは、話題にしてほしくなかったんだよ」
「被災者という役を強いられたみたいでよかった」
本を読み終わった後このセリフが私の頭を離れませんでした。八年前に起こった東日本大震災、その時私は小学校二年生でした。覚えてるのは、授業中にも関わらず先生がテレビをつけて険しい顔で画面を見ていたことと、それからしばらくは震災のことで話題が持ちきりだったことくらいです。正直、当時の私がニュースを見て何を思っていたのか、感じていたのか覚えていません。でも、この本を読んだ後あることを思い出しました。

東日本大震災から一年がたち、私が小学校三年生になって間もない頃、関東から一人の女の子が転校してきました。転校してきた理由は震災の被害にあったからです。それから数日が過ぎたある日「ねえ、地震どんな感じだったん？怖かった？」私はそう話しかけました。テレビでさんさん見てきた地震への興味本位でした。あの時のあの子は笑って「こわかったよお。泣いたもん。」そう答えてくれたけど、心ではどう感じていたかはわかりません。でも話題にするべきではなかった。「被災者」そう線を引いてしまったことであの子を傷つけてしまったかもしれないこと、後悔してもしきれません。

私が震災の事を意識し、学び始めたのは小学校高学年になってからのことです。学校で防災訓練が頻繁に行われるようになり、また震災の被害にあった方からお話を聞く機会が何度かありました。このようなか中で震災に関する知識が少しずつついていきました。地震で家が崩れ、避難することもできず命を

落としてしまった人が大勢いること、大切な家族や友人を失ってしまった人がいること、仮設住宅から出たくても出られない人がいること。しかし、今こうやって並べてみると私が知っていることは客観的知識だけです。震災の被害を受けた人の多くが、自分たちにしかわからない傷を抱えています。梨乃や遼の気持ちは理解したくても完全に理解することはできない、そう改めて感じました。しかしだからと言って、「かわいそう」と印象付けてしまっているのでしょうか。なぜなら、「被災者」というのはその人のほんの一部であり、その人そのものではないからです。確かに震災にあつて抱えてきたものや、必死に乗り越えてきたことがあると思います。でもそれだけでなく、誰かと冗談を言い笑いあったり何かに夢中になったり、そんな日々だつてあるはずです。その人の一面だけを見て、印象付けてしまう。これは私たちの日常でも同じことです。それが相手を傷つけてしまうかもしれない、という意識を持つ必要があるのではないのでしょうか。

震災の被害にあつた人たちは今もまだ震災は終わっていない、終わることはないのだと思います。「ほかのままでも、あんなこと、なかった方がいいと思う」これは遠が言つた言葉です。東日本大震災が起こつてから日本各地で震災への対策が真剣にとられるようになりました。私の住んでいる愛南町でも、中学校と高校が一緒になって地域の方々や避難訓練を行つたり、非常用持ち出し袋を各家庭に置くという対策が行われています。このように起こらなければ見えなかったもの、できなかったことがあるのは確かです。

震災なんてなかった方が良かった、それでももう起きてしまったことを無かつたことにすることはできないのです。震災の被害にあつた人は震災が終わることはありません。でも、この本の主人公梨乃のように周りの仲間とともに前を向いていけるように

なることは、できないことではない、そう思います。この本では最後、梨乃は震災の被害にあつたこと、それで兄を失くしてしまったことを吹奏楽部の仲間へ告白します。それを聞いた仲間の言葉は、少しも不快に思いませんでした。はじめは他の人と違う扱いをされることを恐れていた梨乃がそうすることができたのは、部活動という共通の時間を過ごす中で、梨乃自身を受け入れてくれる仲間がいたからこそだと思います。私もそんな存在になりたい、そう思いました。

誰もが自分自身にしかわからない傷や、苦しみを持っています。そんな中で私に今できること、そして大切なことはその傷や苦しみを理解することではなくて、その人自身をわかりたいと素直に心から向き合うことだと感じています。そして自分なりに一生懸命考え行動することです。その自分なりが、時には人を傷つけてしまうかもしれませんが、けれども含めて、心から向き合うということだと信じて、行動していきます。

読書をさっむ

今回は七人の先生方に、思い出の一冊や読書に関する思い等を紹介していただきました。

小学生のころ

国語科 西川 いず美

小学校のころ、私はたぶん本の虫であった。本屋で立ち読みを長時間するので、本屋のおじさんが、椅子を持ってきてくれたこともあった。学校でも昼休みに借りた本を放課後返し、また、別の一冊を借りていくというような状態であった。ひそかに図書館の本を端から借りて読んでやろうという野望を持



ち、入り口の一番端っこにあったシートン動物記の『狼王ロボ』から順番に借りていた。面白いもの、面白くないもの、よく分からぬもの、とにかくどんどん読んでいくのが楽しくて仕方がなかった。

その本は書架の中段にあった。『てつがくのらいおん』。工藤直子の詩集であった。「らいおんは哲学が気に入っている。」で始まる詩はなぜか私の心に強く残った。物語のようにストーリーを追うのではなく、科学のように事象のからくりを解き明かすのではない、ほわんとしたらいおんとかたつむりの会話。何が私を惹きつけたのか、今読み返しても言語化するのには難しい。しかし、三〇年以上たった今でも、読み返したり、思い出したりする本との出会いは本物だと思ふ。どんな本を読めばいいかわからない、と読書を面倒くさがる人がよくいるが、なんでもいいのか。読み始めよう。偶然に出会う本もある。

今、読みたい本は、何だろう

数学科 古田 賢司

「なんたる失策であることか！」

この台詞に覚えのある人はいるだろうか。これはかつて国語の教科書に載っていた、井伏鱒二の短編『山椒魚』その冒頭である。私が学生の頃、やたらこの台詞が学級内で流行ったことがあった。そのため私にとって井伏鱒二の『山椒魚』という読書体験は、「なんたる失策」を連呼する同級生の姿とともに、心に残ることとなったのだ。

読書体験は、その作品のイメージと共に私たちの中で生き続ける。イメージとは、例えば作中の印象的な台詞や場面もそうだ。私が愛する著書の中に、ロードオブザリングの名で映画化された『指輪物語』というものがある。その最終章で、登場人物が冒険を終えて故郷に帰ってきたとき、一言「かえつてきたぞ」とつぶやく。中学校卒業を間近に控えた私に

とつて、一つの物語が終わったその瞬間は、どんな刺激的な冒険譚よりも強く印象に残った。

読書体験の与えるイメージは、いつ、どんな気持ちで読んだかに左右される。それは何物にも代えがたい最高の財産であると、私は確信している。小学生時代、ホームズではなく怪盗ルパンを読みあさる私は、子供ながらのアウトローを感じていた。中学生時代、初めて太宰治や芥川龍之介に触れた私は、背伸びしたようなくすぐったさを感じていた。高校生時代、可愛らしい挿絵を隠しながら電車の中で読むライトノベルは、私に妙な充足感を与えてくれた。読書は常に人生の片隅で、静かに、しかし確実に、私という人生を彩ってくれていた。

読書体験を通して皆さんの心に残ってきたものはなんだろうか。読書の楽しさや面白さを思い出したとき、次の『今しかできない読書体験』が、皆さんを待っていることに気づくだろう。改めて皆さんに問う。今、読みたい本は、なんだろうか。

漫画からでも字べる

保健体育科 波多野 孝明

皆さんは朝読書の時間以外に読書をしていますか？

私は一人の時間ができると購入していた本を本棚から取り出して読むようにしています。【図書館報】の原稿なので本のことについて書きたいのですが、今回は漫画について書きたいと思います。最近本以外にも漫画に手を伸ばすことも多くなりました。特にこだわりのありませんが、幅広いジャンルに手を出して読んでいます。ここ数年、週刊少年誌にスポーツの漫画が増えてきました。野球・バスケット・ラグビーなどたくさん連載されていますが、その中の一つバレーボールの漫画があります。私の専門としている種目がバレーボールなので、この漫画が連載されたときから興味があつて連載からずつ

と読んでいます。

私が読んでいるその漫画は、中学時代弱小チームに所属していた主人公が高校生になり、全国大会優勝を目標に先輩や同級生の仲間たちと試合を通じて成長して、時にはケンカもしてと、まさにスポーツ青春物語だという作品です。物語の内容は置いておいて、この漫画を読みながら感心することがたくさんありました。一応専門の種目なのでバレーボールを知っているつもりです。しかし、客観的に見た時のバレーボールは非常に大変で難しいスポーツだと感じました。バレーボールはコートにいる六人の中にスパースターが一人いても、チームはうまく働きません。コート上の六人、そして試合に出ていない控えのメンバーを入れた全員で目標に向かって動くからチームとして成り立ち勝利するのです（ラグビー日本代表が言っていた「ONE TEAM」みたいなことですかね）。また、勝つためにも自分たちを成長させたいという食欲さ、上手になるために周りを頼る素直さや、全員が勝ちたいだけでなくお互いを分かち合うことの大切さをこの漫画から強く感じました。

漫画には、現実とはかけ離れた「非日常の世界観」があります。ですが、かけ離れているからこそ客観的に見ることができます。漫画の世界を自分に置き換えてみて物事を考えてみたら、今の自分に言われているように感じて、「はっ」と気づかされたことでもあります。皆さんも、【日常】の生活であまり感じていないことを、漫画の【非日常】の世界から感じ取って、日々の学校生活に活かしてみませんか。

「南高美術室図書コーナー」構想

芸術科 碓 勝貴

私の弟は電子書籍リーダー（電子書籍を閲覧する

ための専用端末」を持っていきます。実家に帰省したある日「兄ちゃん、これ買ったんやけど」と見せてくれました。元々テレビのCMなどを見て電子書籍に興味があった私は、とても期待しながら端末を手にとってみました。

「めっちゃ軽いやん。」

思わず声が出ました。さらに画面を動かしてみると、何百頁もある小説が既にくっつかインストールされており、ちゃんと読めます。聞けばあと数千冊はインストールできるそうです。「す、数千……？」こんな「薄くて軽い板」のどこに膨大な量の書籍が入るのだろうかと驚きました。

また、電子書籍リーダーは普通のタブレット端末と違い、長時間読んでも目が疲れないようになっていきます。フィジカルモニスタである私も、パソコンなどを長時間使用したときに生じる目の疲れには勝てません。そんなところにまで配慮しているのかと感動しました。その他にも多くの機能が備わっているのですが、紙幅の関係上、割愛させていただきます。

専用アプリを用いれば、スマホや普通のタブレット端末でも簡単に読むことが可能です。もう既に利用している人もいるでしょうから、とても身近なものに感じますね。さらに電子書籍はその特性上、優れた文芸作品や貴重な書物等を「データ」として記録・保存し、未来に残すという「アーカイブ」としての役割も担っています。データなので複製も簡単ですし、寿命もありません。

これだけ書けば、皆さんの中にも「紙の書籍の時代はいよいよ終わる」と思う人が出てくるかもしれません。では、ここで紙の書籍がもたらす効果について触れておきましょう。私はそれを勝手に「本棚効果」とよんでいます。

本というのは乱暴に言えば「文字や画像が印刷された紙の束」です。何冊あるとかなりかさばりま

す。それを収納するのが本棚です。本棚は書店や図書館にいけばずらりと並んでいますし、皆さんのお家にもあるかと思えます。本棚があれば、いつの間にか眺めていたり、その中にある本をとりあえず読んでみたりしたことはありませんか？ なんとなく本棚に引き寄せられていくような感覚、それが「本棚効果」です。私が今考えました。

「本棚効果」が発生するのは、皆さんが読書に対して無意識に期待感を持っており、新たな知識や感性への好奇心に飢えているためです。そうでなくとも本棚に本が並んでいるあの雰囲気はどこか愛着を感じたり、本棚の並ぶ空間にわくわくしたりしませんか？ これこそ紙の書籍ならではの特権だといえるでしょう。

現在、美術室の入り口付近に「南高美術室図書コーナー」を設置しています。そこには技法書や画集、その他様々な図書が本棚に収められています。元々は授業で扱う資料として設置したのですが、いつの間にか空き時間に美術室を訪れた生徒が本棚の前に集まり、本を手にとるようにになりました。まさに「本棚効果」が発生しているではありませんか！

読者から見つめる現代社会

英語科 池田 誠

皆さんは最後にいつ・どこで本を買いましたか。私の場合、最近ほとんど電子書籍を読んでいます。

サブスクリプション（定期購読）サービスを使った場合、もはや購入という概念はありません。月額を支払い、読みたい本を読みたいだけ読むのが一般的になってきています。好きなだけ読める上に、部屋の中の物理的なスペースも占有されません。便利な一方で、本というメディアが所有するものから消費されるものに移行しているという現状には、少々寂しさを感ずります。本棚にお気に入りの本を並べると

いう行為は、ある種クラシックな趣味になりつつあるのです。

昨今、「活字離れ」が問題となっています。インターネットが成熟してきている現代社会においては、Web上であらゆる情報を容易に手にすることが可能で、このような時代において、書籍が果たす役割は何なのでしょう。

Web上の情報は雑多であり、情報の質には大きな差があります。だからこそ、Web閲覧においては情報を精選する力が必要です。この力はメディアリテラシーと言われますが、現代社会を生き抜くうえでかなり重要な力です。この力なくして、膨大な情報の海から正しい情報を選び抜くことは非常に困難なのです。

一方、書籍はお金をかけて編集や出版が行われます。一つの本が店頭に並ぶまでには、非常に多くの人が関わり、当然校閲もなされます。こういった理由で、終始無責任な本が出版されることは稀でしょう。したがって、本を読む方が敷居は低いということです。Webに比べてかなり多くの文章を掲載することができる書籍では、筆者の考えを細かく追うことができる方法です。結論に至る過程をしつかりと辿ることが、思考力の養成につながります。ただし、筆者の主張はあくまで一例。書いてあることを鵜呑みにすることが読書の目的ではありません。「なるほど、こういう考え方もあるな」と、別の角度から物事を見る方法を学びましょう。そうすることで、視野が広がると同時に言語的思考力が養われるはずで、要するに、読書によって考え方の引き出しを増やすことができるのです。

活版印刷術が確立されるよりもずっと前から、人類は得た知識を記して次世代に伝えるという仕事を繰り返してきました。その結果が現代社会の繁栄につながっているのです。形を変えつつも、現代に脈々

と受け継がれる知識伝承の一つの手段であることは間違いない。現代社会は、過去の偉人の遺した書物による知識の伝承で成り立っているのです。

読書の習慣を

家庭科 久保田 紗智

私の家族は読書が大好きで、姉は『ハリー・ポッター』の新作を楽しみにしてご飯も食べずにずっと読んでおり、父や母は寝る前に必ず読書の時間を作っていました。私はそんな家族と比べると読書をするのが少なく、母に読みなさいと勧められた『ダレン・シヤン』を少しずつ読んでいたことを覚えていました。

そんな私ですが、社会人一年目のときに先輩から「勉強しようと思ってたくさん本を買ってきたから一緒に読もう」と言われ、時間をつくって一緒に読書をしていました。そのときに読んだ本の中で印象に残っているものが『7つの習慣』という本です。この本には、「主体的である」「終わりを思い描くことから始める」「最優先事項を優先する」「『エゴイズム』を考える」「まず理解に徹し、そして理解される」「シナジーを創り出す」「刃を研ぐ」の七つの習慣を身に付けることの大切さについて書かれており、より良い人生を自分でつくっていくため、より良い人間関係を築いていくために必要な意識や行動について考えさせられました。本を読んだときはすべて実践することは難しいと感じましたが、筆者も「7つの習慣は完全には習得できない人生の原則」と言っています。一つずつスモールステップで、できることから始めることが重要です。自分自身の内面を変えて、成長していくためにみなさんにもぜひ読んでもらいたいです。この本は漫画もあり、それも読みましたがとても分かりやすく書かれています。読書が苦手な人は漫画から読んでみるのも良いと思います。

私は、学生時代に読書をあまりしていなかったことを後悔しています。もし学生るときにしておけばよかったことを聞かれたら、必ず「読書」と答えるでしょう。本から得られた想像力や思考力、視野の広がりなどは人生の糧になります。ぜひ今のうちから読書の習慣を！

「教科書から学ぶこと」

農業科 兵頭 宏美

今回、本について記事を書いてくださいと言われて、本当に困りました。何せ私はこれまで読書と呼べる読書はしてこなかったからです。中学校も高校も部活中心の生活で、図書室に行った記憶はあまりありません。

そんな私が一番見る本といえば、みなさんの身近にある「教科書」です。今は仕事として教科書と接していますが、教科書が実はすごくおもしろい！と思ったのは、教員になってからです。私は農業科の教員です。勤務する学校によって、また他の先生方の転勤によって様々な分野を教えることを求められます。「野菜」「果樹」「草花」「作物」などの栽培系科目や、「農業土木」「畜産」のように、特に専門性が高いものなど、幅広い分野を教えます。私は一昨年まで「草花」を教えていましたが、昨南宇和高校に転勤してきた四月に、「食品加工部門を担当してください。」と言われてきました。現在授業をしている「食品製造」という科目は、この仕事を始めて十数年になりますが、初めて教えます。農業科の教員をしている以上よくあることですが、そんな時に私を助けてくれるのが教科書です。私も教えたことのない分野は、はつきりいつて教科書をさらりと読んだだけでは、全く理解できません。草花を育てながら小麦粉の性質を考えることなんてないからです。だから教科書を何度も読んで、実

習を重ねて新しい知識を身に付けます。

農業科の授業は基本、実習と座学がリンクしています。実習で行ったことを座学で学習して知識を深めていきます。普通科のみなさんは、農業科の教科書をあまり見たことがないかもしれませんが、おもしろい知識がたくさん詰まっています。二学期には、二年生の食品製造の授業で、「納豆はなぜ糸を引くのか?」「マーガリンとバターは親戚か?他人か?」「リンゴの切り口はなぜ褐変するのか?」という授業をしました。私たちは、日常生活の経験から、納豆は糸を引くもので、リンゴの切り口は放っておいたら褐変することは知っています。でもそこになぜ?と思った経験は少ないのではないのでしょうか。学校でメロンパンを作って販売していますが、パンはなぜ膨らむのでしょうか?ウリ科の野菜は人間が受粉してやらないと実がつきにくいのはなぜでしょうか?実習をしていると、こうしたなぜ?がたくさん出てきます。それを補ってくれるのが教科書です。

農業科の教科書はある意味実用書的な部分が強いです。普通教科でも同じことは言えるのではないのでしょうか。先日化学の先生が、一年生の授業で東京の地下鉄で起こった爆発事故を、現在学習している単元に合わせて話をしたそうです。爆発の原因になったのは、アルミ缶によく汚れが落ちると噂のアルカリ性洗剤を入れて持ち帰っていたことです。強アルカリはアルミと化学反応を起こして水素が発生し、爆発します。水素の気体「H₂」の体積の学習をしていた生徒にこの話をすると、「なるほど!」と生徒はとても納得していたということでした。

普段教科書だけ読んでいると、自分の身近なところで役立っていると意識することはあまりないかもしれませんが、教科書にはおもしろい知識がたくさん詰まっています。いやいや勉強しないで、教科書を楽しんでみることをお勧めします。

図書委員長雑感

図書委員長 二年 新井 彩桜

みなさんは月に何冊本を読みますか。最近では、SNSや勉強などに追われ、月に一冊も本を読まない高校生が五〇%を超えているというデータもあります。読書が好きな私は、忙しくても月に三冊以上本を読むことを心がけています。静かで落ち着いた雰囲気が好きで、図書館に通い詰めたときもありました。

読書には、語彙が増える、様々な話題に対応できるようにするなど多くのメリットがあります。語彙が豊富でどんな話題でも知ったかぶりをせず、しっかりと自分の考えを言える人は魅力的ですよね。私が読書を続けている理由も、こんな人になりたいからです。

読書が苦手な方の中には、『自分に合った本がない』という人もいるのではないのでしょうか。南高の図書館には様々なジャンルの本があり、図書委員が書いたポップなども展示しています。自分に合った本が分からない方。ぜひ一度、図書館に足を運んでください。きっと自分に合った本が見つかりますよ。



令和元年度の寄贈本の一部紹介

- 『小説 天気の子』
- 『意味がわかると鳥肌が立つ話』
- 『マチのお気楽料理教室』
- 『生きづらさを抱える君へ 逃げ道はいくらでもある #withyou』
- 『説明がつかない現象と私が生徒会に入った説明』
- 『オトナ女子の不調をなくす カラダにいいこと大全』
- 『自衛隊防災 BOOK』 『シネマごほん』 『屍人荘の殺人』
- 『「空気」を読んでも従わない 息苦しさからラクになる』など



南高生がよく読んだ本ベスト10 (4月~1月)

	書名	著者名	発行所
1	八月の終わりは、きっと世界の終わりに似ている。	天沢夏月	KADOKAWA
	僕は君を殺せない	長谷川夕	集英社
3	かがみの孤城	辻村深月	ポプラ社
	だから、そばにいて	カフカ	ワニブックス
5	いつか、眠りにつく日	いぬじゅん	スターツ出版
	はたらく細胞1	清水茜	講談社
	何度も諦めようと思ったけど、やっぱり好きなんだ	カフカ	KADOKAWA
	僕はロボット越しの君に恋をする	山田悠介	河出書房新社
10	コンビニ人間	村田沙耶香	文藝春秋
	トラペジウム	高山一実	KADOKAWA

編集後記

昨年度から二年間にわたり、「インターネット時代の学校図書館の役割」を研究テーマのもと、生徒に活き活きのいい読書体験を、そして本との「よい出会い」ができることを目指して、図書館整備を始めとして研究を進めてきました。

本校の教員数は徐々に減ってきており、図書館司書がいないうちで、校務分掌を超えて多くの先生方が、そして生徒が図書館教育の実践に協力してくれました。その中でも特に頑張ってくれたのが、図書委員です。長期休業中も図書館整備のために登校し、蔵書点検や図書の除籍・廃棄、ポップなどの装飾作り、館内のレイアウト替え、明屋書店や県立図書館との連携など、実に多くのことに懸命に取り組んでくれました。感謝してもきれません。

また、先生方や生徒から読み終わった本を多く寄贈いただきました。今年度は、2月末時点でなんと一四二冊の寄贈本をいただき、館内に並べることができました。ありがとうございます。

このように多くの方々のご協力によって、本校図書館は今日も開館することができています。一万冊を超える本を廃棄したため、館内がすっきりし、新たにかわいい椅子を置くことができました。その結果、昼休みの来館者数も増え、昨年度は一日五人程度だったのが、今年度は最大三〇人にまでなりました。まだ図書館に来たことがない人、ぜひ一度、お越しください。本は、時にあなたの悩みを一筋の光を投げかけるものであり、人生の一端を教えてくれるものであり、世界の深淵を覗かせるものであり、あなたの喜びにつながり、生活を豊かにしてくれるものだと私は信じています。あなたが来てくれるのをお待ちしております。